

研究ノート

初年次教育におけるビブリオバトルの手法による取り組みと課題 2

——「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」実践報告とアンケート分析——

A Practical Report of First-Year Experience on utilizing method of a Social Book Review Game: Bibliobattle (Part2)

湯浅千映子*
YUASA Chieko

The purpose of this dissertation is to clarify whether it is possible to conduct book review games and book poster exhibitions in cooperation with university libraries and regional libraries when teaching university students their first year experiences. In this paper, we mainly report the following contents: (1) Detailed contents of social book review games (2) Detailed contents of book poster exhibitions (3) Analysis of questionnaires answered by participants of book review games and book poster exhibitions As a result, it was confirmed that it was effective for students to utilize the "Bibliobattle" method presentation in learning their first year of experience at college.

キーワード: ビブリオバトル (Bibliobattle), ポスターバトル (Poster battle), 初年次教育 (First Year Experiences), 実践研究 (aquestionnaire), 大学図書館 (University library)

1. はじめに

2018 年度に引き続き、大阪観光大学国際交流学部の 1 年生有志が参加し、大阪観光大学の大学祭企画として、「第 2 回図書紹介バトル」大会を開催した。

これは、参加者同士で面白いと思う本を持ち寄り、本を紹介し合い、一番面白いと思う本を選ぶ「ビブリオバトル」(谷口忠大氏が提唱)の「本を通して人を知る、人を通して本を知る」という理念とその方法に準じ、実施したものである。

国際交流学部 1 年生が受講する初年次教育科目「プレスタジオ」では、図書館で借りた本を精読した後、本の内容を要約し、根拠を示した上で自身の意見を主張する「ブック・レポート」を最終課題とし、授業を展開している。その授業成果を口頭発表という方式で披露する場として位置付け、「図書紹介バトル」を行った。

「図書紹介バトル」参加に向けての準備段階では、①図書館で「情報収集」をし、本を探す。②本の紹介を書式に沿って「レポート」として書く。③レポートの内容をもとに「スピーチ」する。「図書紹介バトル」参加の過程には、こうしたアカデミックスキル要素も併せ持った活動がなされ、「ビブリオバトル」への参加を意識した授業は、初年次段階の学修に有効であると考えられる。

大会当日は、個人発表 4 名とグループ発表 3 組の学生が好きな本の魅力についてスピーチし、会場にいる(1 年生や本学学生を含む)観戦者が読みたいと思う本に投票し、「チャンプ本」を決定した。

また今回は、「おすすめ図書ポスター展」も同時に開催した。これは、中川(2017)で報告された「ポスターバトル」の授業実践を参照し、試みたものである。学生自らが好きな本への思いを自由に表現したポスターを制作し、それを大学祭会場に掲示し、こちらも学生や一般の来場者の投票により優秀作を選出した。このポスター展には、「図書紹介バトル」の観戦者として、あるいは運営スタッフとして、大会を盛り上げた国際交流学部 1 年の 38 名が作品を出展した。

第 2 回の本大会では、前回と異なる新たな試みとして、大会の開催に際し、大学図書館や地域図書館との連携を図った。大阪観光大学図書館と大学最寄りの地域図書館である熊取図書館に協力を仰ぎ、大会前には、学生が「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」でどんな本を紹介するのか、その選書のサポートを、また、大会後には、図書館内の特設コーナーにおいて、学生の選んだ「紹介本」と「図書ポスター」の展示を依頼した。

谷口(2013)は、「ビブリオバトル」の機能として、「書籍情報共有機能」(参加者で本の内容を共有できる)と「良

*大阪観光大学国際交流学部講師

書探索機能(いい本が見つかる)など4つを挙げる。「ビブリオバトル」でおすすめの本を紹介し、それが参加者にとっての新たな本との出会いとなり、また、「ビブリオバトル」開催により、「ビブリオバトル」の場に興味深い本が集まってくるという考え方である。

こうした考えを前提とした場合、大会に向け、発表者が「良書」を選ぶこと、また、大会を終え、観客がその「良書」に興味を持ち、実際に手にして読むことは、いずれも重要視すべき段階であると言える。ここから、発表者による図書の「選書」から参加者が図書の次なる新たな読者となるまでという一連の流れについて、全体を「『ビブリオバトル』活動」としてとらえることができよう。

そこで、第2回の本大会は、学生のアカデミックスキルの披露にとどまらず、大会の参加を契機とし、学生の図書館利用の促進と読書活動の推進につなげることを主たる目標に掲げ、「『ビブリオバトル』活動」を行った。本稿は、その実践報告となる。

本稿では、以下の3点について報告する。

- (1)「図書紹介バトル大会・図書ポスター展」に向けて
- (2)「図書紹介バトル大会・図書ポスター展」大会の概要
- (3)「図書紹介バトル大会・図書ポスター展」大会後アンケート結果とその分析

2. 先行研究

(1)「ビブリオバトル」の本質

谷口(2013)は、「人格を持った一個人に知識が結びついている」という考えを背景とし、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくり手法」として設計された「ビブリオバトル」に、次の4つの機能があるとした。

- ①「書籍情報共有機能」(参加者で本の内容を共有できる)
- ②「スピーチ能力向上機能」(スピーチの訓練になる)
- ③「良書探索機能」(いい本が見つかる)
- ④「コミュニティ開発機能」(お互いの理解が深まる)

このうち、④の「コミュニティ開発機能」について、谷口(2013)は、互いに本を紹介することで、発表者の人となり、個性、知識、背景などをコミュニティ内で共有していく機能であるとし、コミュニティ内で繰り返し「ビブリオバトル」を行うことで、相互理解を深め、インフォーマルコミュニケーションを活性化させるという。

岡野(2016)は、「読書」という行為を拡張して重層的にとらえ、本を読む行為の前後も含め、「①本に出会う」・「②本を読む」・「③本を語る」・「④本を伝える」といったプロセスに細分化できるとし、「ビブリオバトル」によって、互いの読書体験を分かち合うことで、お互いの人となりを分かり合うことにつながり、読書という概念が自分一人だけの静的なものから複数の人同士の動的なコミュニケーションツールへと変わるとしている。

(2)大学教育における「ビブリオバトル」の実践

1) 初年次教育における取り組み

九州国際大学(2016)の大学図書館による学修支援の実践報告がある。図書館ガイダンスと連動させ、「本探し」から「レジュメシート」による思考の整理や「原稿作成シート」による思考プロセスの可視化、グループワークによる練習と「発表分析シート」による情報共有、「3段階評価シート」による相互評価などの活動例を紹介する。また、事前事後アンケートの結果、「本を読む」・「人前で話す」・「文章を書く」ことに対し、学生の意識が上昇したという。九州大学(2012)は、大学図書館と連携し、初年次教育の授業に「ビブリオバトル」を導入し、「学部学生のまとまりや連帯意識の啓発」という初年次教育の第二の目的達成のため、「ビブリオバトル」が適しているとする。相澤他(2015)でも初年次教育の能動的学修として「ビブリオバトル」を行い、自己評価アンケートの結果から「ビブリオバトル」により学生の自己効力感とコミュニケーションスキルの向上があったという。

2) 日本語教育における取り組み

山路他(2013)は、留学生の日本語パブリックスピーキング指導に「ビブリオバトル」を取り入れ、参加学生の発表例とアンケート結果から、プレゼンテーション技能の向上に有効だと結論付けている。他にも留学生の日本語能力や口頭表現能力の向上を目的とした「ビブリオバトル」の実践報告に堀(2016)・深澤(2017)などがある。深澤他(2018)は、「ビブリオバトル」のスピーチを分析し、導入部で「コンテキスト共有」(話し手と聞き手が共通の経験や考え、感情等に言及し、両者の理解基盤を顕在化させる)をしてスピーチを展開させ、「メタディスコース表現」を効果的に用いることがスピーチの説得力につながるとしている。

(3) ポスターバトル

中川 (2017) は、司書課程の授業の受講学生を対象に行った「ポスターバトル」の実践を紹介している。学生が「おススメ本」のポスターを作成し、学生同士で回覧し、投票によって「チャンプポスター」を決定する。その後、ポスターは、大学図書館や地域図書館に展示されたという。「ポスターバトル」のメリットとして、「ビブリオバトル」と同様に読書と人の輪が広げられる点にあるとする。「ビブリオバトル」が会場にいた人のみが発表者や本についての情報を共有するのは異なり、「ポスターバトル」の場合、展示によって来館者に長時間「おススメ本」が紹介されるという。「ポスターバトル」を通し、かけがいのない人と本の出会いが期待できるとしている。

3. 「図書紹介バトル」大会開催に向けて

(1) 第 1 回大会からの変更点

大学祭での第 2 回大会の開催が決定したことを受け、昨年度の第 1 回「図書紹介バトル」参加学生 3 名を調査協力者とし、フォローアップ調査を行った。3 名は、前回大会の様相を映したビデオ映像と湯浅 (2019) でも示した大会後の「発表者アンケート」の結果を見ながら、大会運営や発表のルールについての感想や改善すべき点を自由に話し合った (調査者の筆者は同席していない。また、調査協力者の許可を得て、話し合いの様子を録音した)。彼らの語った内容に基づき、本大会では、以下の 3 点について変更した。

- (1) チーム発表から個人発表中心とする
- (2) 投票を挙手から投票用紙に記入する方式とする
- (3) 大会の運営全般を学生主体で行う

(1) について、前回大会では、学部 1 年生の 5 スタジオ (ゼミ) に属する全学生 (学部留学生を含む) が 4 名～6 名のチームを組み、チーム対抗で競うという、「ビブリオバトル」の公式ルールとは異なる方式を採用した。調査に協力した 3 名は、いずれもチームリーダーを務めたが、練習時にチームを統率する負担が大きかったとの指摘があった。これを受け、本大会では、従来の「ビブリオバトル」の方式 (一人 5 分で話す) に則った「個人発表部門」と、前回同様、2、3 名でチームを組み、発表する「グループ発表部門」の二本立てとし、学部 1 年生

有志に発表者募集を呼び掛けた。

これにより、発表者として大会に参加できるのは、多くて 15 名前後となる。そこで、残る学生については、大学祭で同時開催した「図書ポスター展」の参加に誘導した。そして、「図書ポスター」優秀作に選ばれた学生有志にもスピーチの機会を設け、「ビブリオバトル」大会時に壇上に上がり、会場の観客に向け、図書ポスターへの思いを語ってもらうこととした。

(2) について、前回大会では、来場者の挙手によって「チャンプ本」を決めたが、調査協力者からは、衆人環視の中では、「本」にではなく、発表者という「人」に投票をする者も少なくなかったとの意見が出た。これを受け、投票の公平性を保つため、一人ひとりが投票用紙に「面白い」と思う本を書いて投票する方式に変更した。

(3) については、大会の司会進行を学生 (2 年生と 1 年生のペア) が担うこととし、当日の大会のプログラム内容や進行の仕方、大会の告知ポスターや投票用紙のデザイン、会場で流す動画の制作に至るまで、大会運営に関わる多くの業務に学部 1 年生が携わることとなった。その際、教員は、参加学生に対し、学生自身が「図書紹介バトル」というイベントに主体的に関わり、大学祭の観客を迎え入れるホストであるとの意識付けを心がけた。

(2) 図書館との連携

「図書紹介バトル」の個人発表・グループ発表の発表者が決まると、大阪観光大学図書館と熊取図書館の協力を得て、学生自身で良書を探し出すところから『ビブリオバトル』活動をスタートさせた。熊取図書館では、平成 24 年から「ビブリオバトル」の取り組みがあるという。谷口 (2013) は、公共図書館で広がる「ビブリオバトル」の動きの一例として、熊取図書館の名を挙げている。

ここで再び、谷口 (2013) の 4 つの「ビブリオバトル」の機能と岡野 (2016) の「読書プロセス」から考えたい。

谷口 (2013) は、「ビブリオバトル」の発表者と参加者は、共有する「ビブリオバトル」という場の中でコミュニケーションを展開し、良書を媒介に互いの理解を深めるとする。また、岡野 (2016) は、「ビブリオバトル」において、その参加者は、発表者の「本との出会い方」・「本の読み方」を分かち合い、また、そうした発表者の読書体験を共有した参加者がその本の面白さをまた別の誰か

に向けて発信し、今度は本を届ける側に回る（これを岡野は、「種まき」と表現する）という。

これらの立場を総合して考えると、コミュニケーションの場を共有する以前から、また、コミュニケーションの場から離れた後も別の場所で、本を通したコミュニケーションが連綿と続き、次なる新たな読者を生んできたと言えよう。よって、本稿では、良書との出会い・選書という「入口」から参加者が図書館を訪れ、良書を借りて読むという「次の扉」までを含む全体を指し、『『ビブリオバトル』活動』と呼びたい。

見方を変えれば、「ビブリオバトル」大会の参加者が、良書の発表を聞き、良書に興味を持ち、図書館に足を運び、良書に出会う行動を起こすまでを導いてはじめて、大会としての目的を完遂したと言えるのではないだろうか。

そこで、「図書紹介バトル」の「紹介本」について、「①大阪観光大学図書館あるいは熊取図書館に所蔵する本であること」・「②本のテーマが「世界の食」あるいは「世界の文化」（本学の第 14 回大学祭のテーマ）であること」という 2 つの条件を付けた。

これらの条件に見合う本を探すべく、発表者の学生 10 名を対象に熊取図書館を訪問する「選書ツアー」を実施した。熊取図書館の特別な計らいで、25 万冊もの書籍が眠るといふ地下書庫にも案内していただき、学生たちは、古い書籍や大型本、絵本など、普段目にすることのない貴重な本を手にとることができた。学生たちは、興味津々の様子で、書架を回り、「紹介本」を吟味して選んでいた。

一方、大阪観光大学図書館では、館内に「世界の食」・「世界の文化」をテーマとする本を集めたコーナーが設けられ、図書館員が薦める図書の中から「図書紹介バトル」の「紹介本」を選ぶ学生もいた。

また、「図書紹介バトル」大会開催の折には、来場者に「大会プログラム」を配布したが、そのプログラムには、両図書館に協力を仰いだ旨を記すとともに、「紹介本」のタイトルの横に、「熊取図書館」所蔵の本か、「大阪観光大学図書館」所蔵の本かをマークで記載した。これは、「大会プログラム」が大会を終えた後も「良書ナビ」として活用され、観客が図書館に出向き、本を手にとることを期待して行ったものである。

大会開催後の「展示」については、後節で述べる。

(3) 「図書紹介バトル」大会の開催までの準備

ここでは、国際交流学部 1 年生のグループ発表 1 組（日本人学生・学部留学生のチーム）が発表準備に取り組み、発表当日を迎えるまでを振り返る。

筆者が担当した後期「Aスタジオ」授業では、第二回～第五回まで、授業時間の一部を「図書紹介バトル」の発表準備に充てた。具体的な活動は、湯浅（2019）で紹介した「スタジオ I B」の授業内容をほぼ踏襲している。

表-1 「図書紹介バトル」当日までの授業

第二回授業	グループ発表の「紹介本」の選定
第三回授業	「紹介本」を読み合う。書誌情報など、「図書紹介バトル」で話す内容を自由にメモ。
第四回授業	5 分間で何を話すか、話す内容の取捨選択と「図書紹介バトル」用ワークシートへの記入
第五回授業	1 枚のワークシートを見ながら、話す練習と発表時間中の役割分担
大会前日	大会会場の大講義室で「図書紹介バトル」の出場者全員が集まり、大会の予行演習

彼らが「紹介本」に採用したのは、メンバーの一人が前期「プレスタジオ」授業の課題「ブック・レポート」で使用した、『私は私のままで生きることにした』（キムスヒョン作）であった。まずは、この図書をグループメンバー A が他のメンバー B・C に紹介し、その本についての情報や面白さを伝えていた。この書は、1 話完結のエッセイ集であったため、学生らは、互いにページをめくり、好きなフレーズやエピソードを、自身の経験と照らし合わせつつ探していた。

その上で、あらかじめ提示した「本のあらすじや背景は？」・「一番好きなページは？」・「本を読んでほしい人は？」などの項目に答える形で発表のアイデアを出し合い、ワークシートに記入した。第五回授業では、ワークシートに書き出したアイデアを、声に出して文章化して話す練習を行った。谷口（2013）の「ビブリオバトル」の原則に従い、発表原稿を読み上げるのではなく、「その場で目の前の観衆に向かって自分の言葉で改めて言葉を紡ぎ出す」よう、ワークシートのメモを目で追い、文章にしてつなぎながら、自由に語ることに注意を払った。

4. 「図書紹介バトル」大会当日の概要

「図書紹介バトル」は、本学の大学祭「明光祭」2 日目の午前に執り行われた。参加学生、「スタジオ」担当教員の他、学生、教職員、一般の方の観覧も多くあった。

大会当日の式次第は、以下の通りである。

表-2 「図書紹介バトル」当日の大会進行

10 時 30 分開場 図書ポスター優秀作を会場に掲示、大会パンフレットや投票用紙の配布など
11 時開会 (一). 開会の挨拶・進行説明 (二). 「図書紹介バトル」個人発表 3 組 (三). 「図書ポスター展」優秀作発表と作者のスピーチ (四). 「図書紹介バトル」グループ発表 3 組 (五). 参加者投票と集計 (集計を待つ間、図書ポスターを制作の様子や大会発表の練習風景を撮影した動画を流す) (六). 表彰式 (賞状と副賞の授与) (七). 全体写真撮影
13 時 00 分頃閉会

大会開催までの準備と当日の運営について説明する。

大会の 1 か月前から「図書紹介バトル」の告知ポスターを学内に貼り出した。また、当日の会場で配布する、式次第の書かれた大会プログラムと投票用紙を作成した。会場に映し出すタイマーや動画も「プレスタジオ」担当教員と学生が協力し、制作・編集した。優秀チームや個人を表彰するための賞状や副賞の商品も用意した。

次に、大会の参加者について述べる。本大会の発表には、4 スタジオの 1 年生が参加した。その内訳は、日本人学生 3 名・学部留学生 10 名 (中国・ベトナム・バンダラデシュ) である。

紹介した本の情報 (タイトルと著者名) 以下に記す。

表-3 「図書紹介バトル」で紹介された本 (発表順)

<p>●個人発表 4 名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生 A 『侍メジャーリーガー列伝 イチロー』 (本郷陽二) ・学生 B 『JAL123 便墜落事故』 (杉江弘) ・学生 C 『ガラスの天使』 (スーザン・ヒル) ・学生 D 『世界がもし 100 人の村だったら』 (池田香代子) <p>●グループ発表 3 組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム「中華一番」 『世界の食文化 2 中国』 (周達生) ・チーム「天下無敵」 『誰も知らない世界のことわざ』 (エラ・フランシス・サンダース)
--

・チーム「青春」 『私は私のままで生きることにした』 (キム・スヒョン)

5 分の発表時間の後、3 分程度の質問タイムを設けた。観覧者から「紹介本」について、次のような質問が出た。

表-4 「図書紹介バトル」発表時の質問内容の一部

- ・もともと野球が好きでイチロー選手の本を選んだのか? (『侍メジャーリーガー列伝 イチロー』)
- ・好きな飛行機の機体とおすすめの航空会社を教えてください。(『JAL123 便墜落事故』)
- ・ (話の中で) いちばん共感できた部分は何か? (『ガラスの天使』)
- ・もし女性になれるとしたら何をしてみたいか? (『世界がもし 100 人の村だったら』)
- ・日本の焼肉と中国の焼肉のちがいは何か? (『世界の食文化 2 中国』)
- ・自分の国のおもしろいことわざを教えてください。(『誰も知らない世界のことわざ』)
- ・筆者が『私は私のままで生きることにした』という心境になったのは、どんなきっかけがあったのか?

質疑応答では、作品の内容についての質問だけではなく、発表者の個性や考え方、経験をたずねるやり取りがあった。また、昨年も見られた光景であるが、「あなたの考えるこの作品の主題は何か?」という問いに、発表者が考え込むも、観客側の学生からヒントを得て、回答できたという場面もあった。会場全体に徐々に一体感が芽生えていき、その場が和やかな雰囲気となった。そこには谷口 (2013) の「コミュニティ開発機能 (お互いの理解が深まる)」が存在していたものと思われる。

すべての発表を終え、来場者や参加学生、教員による投票の結果、『誰も知らない世界のことわざ』を紹介したチーム「天下無敵」(日本人学生 1 名・学部留学生 2 名) が第一位となった。チームリーダーの日本人学生にその勝因をたずねたところ、「大きな声で観客の方を向き、観客に語りかけるように発表するようにした」からではないかと語った。

5. 「図書ポスター展」の開催

(1) 「図書ポスター」制作の意義

「大きな会場で 5 分間も発表をするのは苦手だな、で



写真 - 1 大阪観光大学図書館に展示された図書ポスター

も私のおすすめしたい本をみんなに知ってほしい」との学生の声を受け、「図書紹介バトル」大会で発表した学生以外の国際交流学部 1 年生 38 名が参加し、「おすすめ図書ポスター展」を同時開催した。

「図書ポスター」とは何か。中川 (2017) によれば、厚手の規定サイズ(A4)の用紙に、「本の題名」、「作者名」、「簡単な本の紹介文」を含み、イラストやレタリング文字で本の面白さを表現するものと定義づけられる。

「図書紹介バトル」と「図書ポスター展」は、それぞれ異なる発表形式ではあるが、両者に共通点がある。それは、谷口 (2013) の「書籍情報共有機能」・「良書探索機能」を有する点である。「図書ポスター」を目にした人は、ポスターを通して、本と出会い、本の情報を知り、また、その本の面白さを追体験できる。また、誰かの読書体験を分かち合い、別の誰かに本の面白さを届ける「種まき」(岡野 2016) という考えに立脚して考えれば、「図書ポスター」は、「本の面白さ」を言語とイラストで表現した、「種まき」のもう一つの形態であると言える。

中川 (2017) の指摘の通り、「ビブリオバトル」が 5 分間という発表時間の中で本の面白さを伝えるため、情報量が少なくなるのに対し、「図書ポスター展」は、発表の場に居合わせなくとも、ポスターを眺める環境があれば、いつでもどこでも本の面白さに触れることができる。これは、「ビブリオバトル」にはない、「ブックポスター」だけの利点である。

実際、「図書紹介バトル」大会の会場入口に「図書ポスター」の優秀作を数枚展示したところ、大会の途中や大会終了間際に訪れた来場者で、5 分間の発表が見られなかった方々が「図書ポスター」の前で足を留め、興味深く見入る姿があった。

さらに、今回は、「図書紹介バトル」大会の「個人発表」と「グループ発表」の合間に「優秀図書ポスター」を紹介するコーナーを設け、「図書紹介バトル」の「チャンプ本」の投票と併行して、「最優秀図書ポスター」も来場者による投票によって選出することとした。これは、図書ポスターの優秀作の発表と最優秀作の選出を「図書紹介バトル」大会の中で行うことで、大会自体の集客の向上を狙うという意味もあった。

「優秀図書ポスター」の作者は、壇上に上がり、司会者からのインタビューを受ける形で本の面白さを語った。ポスターを制作した学生にも大会発表の場を設けたことで、ポスターの作者の「人となり」を知らせる機会ともなり、谷口 (2013) の「コミュニティ開発機能」を担保することができた。

(2) 「図書ポスター」制作から展示・発表まで

1) 「図書ポスター」の制作

まず、「図書ポスター」制作にあたり、共通フォーマットを提示した。「図書ポスター」は、参加者個人が A4 用紙一枚に「本の題名」、「作者名」、「簡単な本の紹介文」を含んだポスターを作ることを原則とし、グループで 1 冊の本を読み合い、その本の面白さを表現することも可とした。この場合、グループメンバー 1 名につき、A4 用紙一枚を使って描き、それらを組み合わせて、一つの作品とすることを推奨した。

また、「図書ポスター」で紹介する本の「選書」については、前節で述べた「図書紹介バトル」大会と共通する条件を付け、大阪観光大学図書館と熊取図書館所蔵の本で、「世界の食」・「世界の文化」をテーマとする書の中から選ばせた。

ここで、筆者が指導した学部留学生 (中国 5 名・ベトナム 1 名) のグループの取り組みを見ていく。

彼らは、まず、大阪観光大学図書館で『誰も知らない世界のことわざ』という図書を見つけ、その本をポスターにして紹介することに決めた。この本は、見開き 1 ペ



写真 - 2 「図書ポスター展」最優秀図書ポスター(Business English and Communication Sixth Edition (H) by Marie M. Stewart, Kenneth Zimmer, & Lyn R. Clark)

ージに世界各国のことわざを解説する短い文とイラストが描かれた、オムニバス形式の本である。彼らは、その中からお気に入りのページを探し出し、そのページに書かれたことわざをイメージして、ポスターを制作することに決めた。

その後、「本の紹介文」に何を書くのかを話し合った。

「図書紹介バトル」の準備段階と同様に「本のあらすじや背景」などの項目に沿ってアイデアを整理した。その上で、実際にポスターを描く段階に入った。ことわざを紹介するポスター各 1 枚と本全体を紹介するポスターの計 7 枚を制作した。一人ひとりが自由な発想でレタリング文字やイラストを駆使し、思い思いに描いていった。

2) 図書ポスターの展示

学生が描き上げたポスターは、大学祭一日目に大学構内の展示コーナーに掲示した。ポスター掲示のレイアウトも学生自身で考えたものである。学生は、「図書ポスター」の前で足を留めた来場者に声をかけ、いちばん読みたいと思う本のポスターはどれかをたずね、掲示したポスターの下に一人一枚、シールを貼り、投票してもらった。その中で、投票数の多かった 4 作品を選出、その 4 作品を大学祭二日目に開催した「図書紹介バトル」大会の会場に掲示し、決選投票を行う形とした。

3) 「優秀ポスター」の発表と「最優秀図書ポスター」の選出

「優秀ポスター」の制作者 7 名 (日本人学生 1 名・学部留学生 6 名) は、ポスターを手に壇上に上がり、ポスターに描かれた本の紹介や「なぜその本をポスターに描いたのか」などを即興でスピーチをした。司会者からマイクを向けられ、緊張した面持ちをしながらも、司会者からの問い (イラストや文字に託した思い・描く際に工夫したこと) に、真摯に伝えようとする 1 年生の姿が印象的であった。

投票の末、最優秀作に選ばれたのは、写真 2 の図書ポスターであった。学部留学生 (バングラデシュ出身) の作品である。本ポスターには、日本をイメージするイラストとメッセージがちりばめられている。この本を国際交流学部の学生にぜひおすすめしたいというメッセージも添えられている。ポスターを制作した学生によると、ポスター内部のメッセージやイラスト、デザインは、「紹介本」の中に登場しないものばかりであるという。では、どんな思いで「図書ポスター」を作ったのかをたずねると、「本を読み、自分でイメージした内容を組み合わせ、自由に文字やイラストにして描いた」とのことである。

彼は、日本語能力に自信がなく、5 分間の発表には、気後れて挑戦できないと話していた。しかしながら、ポスター制作によって、彼の巧みな表現力が発揮され、本の面白さを伝えることに成功している。同じ時間や空間を共有しなくとも、ポスターの作者とそれを眺める相手との間に、一枚の図書ポスターを介したコミュニケーションがここに成立したと言えるのではないだろうか。

6. 大会後アンケートの分析

(1) 調査 1 来場者 (一般) アンケート

「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」終了後、「来場者 (一般)」・「来場者 (学生)」・「出場者」の 3 者を対象とするアンケートを実施した。

「来場者 (一般)」アンケートでは、「本の内容がわかったか」、「本に対する思いや考えが伝わったか」・「発表態度」・「発表時間の長さ」などを 3 段階評価でたずねた。

6 名から回答を得た。いずれの項目も「a よかった」との高評価を得た (平均 2.4)。自由回答では、「本の印象は書き方や内容によって変わることから、『ビブリオバトル』の難易度の高さを感じた」・「日本語がたどたどし

いながらも深みのある内容を扱う発表があり、感心した」・「グループ発表で、一人一人のパートがあり、自身の言葉でしっかり伝えているのが印象的だった」・「発表者の意識が高く、セミフォーマルのスタイルで発表する学生もおり、好感が持てた」といった声が寄せられた。

(2) 調査 2 来場者 (学生) アンケート

1) 調査の概要

「来場者 (学生)」アンケートでは、発表を見守る観戦者として、さらには、大会の運営に携わる一員としての意見をたずねた。

アンケート項目は、九州国際大学図書館 (2014)・山路 (2013) を参照し、湯浅 (2019) の質問項目 (「4. [質問] 図書館に行きたいと思いませんか」) を加えた以下の 9 つの設問を立てた。

表 4 「図書紹介バトル (来場者・学生)」のアンケート項目

1. [質問] 図書紹介バトルで参加者の発表を聞くことができ、楽しかったですか。
2. [質問] 図書紹介バトルで参加者の発表を判定する (投票する) ことができ、楽しかったですか。
3. [質問] 図書紹介バトルに参加して、発表者が紹介した本を読みたいと思いませんか。
4. [質問] 今回の図書紹介バトルでは、大阪観光大学図書館や熊取図書館の本を紹介しました。図書館に行きたいと思いませんか。
5. [質問] 今回の「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」に参加して、本を読むことが好きになりましたか。
6. [質問] 発表時間 (スピーチ 5 分 + 質疑応答 2 分) は長いと感じましたか。短いと感じましたか。
7. [質問] 今回の「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」に参加した経験がこれからの学び (レポートを書いたり、口頭発表をするなど) の役に立つと思いますか。
8. [質問] 来年も国際交流学部の「図書紹介バトル」を観たいと思いませんか。
9. [質問] 来年は国際交流学部の「図書紹介バトル」で発表したいと思いませんか。

回答は、「a はい b まあまあ c どちらとも言えない d あまり e まったく」の 5 段階評価とした。

さらに、自由記述式のアンケートとして、「大会に参加してよかったこと・反省すること」・「来年の大会に期待

すること (改善点)」についても質問した。

本調査は、「図書紹介バトル」大会終了後に大会会場で質問紙を配布し、一斉に実施した。回答者は、29 名。留学生か日本人学生かについては、問題としていない。

2) 調査結果

「来場者 (学生)」アンケートによる調査結果の 5 段階を「はい」を 4 点、「まあまあ」を 3 点、「どちらとも言えない」を 2 点、「あまり」を 1 点、「いいえ」を 0 点として点数化し、その平均値を出した。

「来場者 (学生)」アンケートで、平均値が最も高かったものは、質問 5 であった。以下、平均値 3 以上の項目を高得点の順に挙げる。

5. [質問] 今回の「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」に参加して、本を読むことが好きになりましたか。

はい 14 名	まあまあ 12 名	どちらとも言えない 2 名
あまり 1 名	まったく 0 名	平均 3.34

1. [質問] 「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」で参加者の発表を聞くことができ、楽しかったですか。

はい 13 名	まあまあ 11 名	どちらとも言えない 4 名
あまり 1 名	まったく 0 名	平均 3.24

3. [質問] 図書紹介バトルに参加して、発表者が紹介した本を読みたいと思いませんか。

はい 9 名	まあまあ 15 名	どちらとも言えない 4 名
あまり 1 名	まったく 0 名	平均 3.1

2. [質問] 図書紹介バトルで参加者の発表を判定する (投票する) ことができ、楽しかったですか。

はい 8 名	まあまあ 16 名	どちらとも言えない 5 名
あまり 0 名	まったく 0 名	平均 3.1

4. [質問] (中略) 図書館に行きたいと思いませんか。

はい 9 名	まあまあ 15 名	どちらとも言えない 3 名
あまり 2 名	まったく 0 名	平均 3.07

最も得点が高かったのは、大会を通して本が好きになったかどうかをたずねた「質問 5」であった。湯浅 (2009) の昨年度の大会アンケートでは、「他の発表者が紹介した本も読みたいと思ったか」の得点が低かったが (平均 1.729)、本アンケート「質問 3」を見ると、高い数値となっている。「図書館に行きたいと思ったか」という「質問 4」も「はい」・「まあまあ」合わせて 24 名が「行きたい」と答えており、高得点であった (平均 3.07)。

これらの結果は、本大会で、大学図書館や地域図書館

に所蔵する本の中から選書するという条件を付けたことが功を奏し、大会の準備段階から図書館に足を運び、図書を手に取る機会が増え、学生自身の図書そして図書館への関心が増したものと推測される。

この他、昨年度のアンケートでは「チャンプ本」を選ぶ判定が楽しかったかどうかをたずねる「質問 2」が低得点であったが、本大会のアンケートでは、「チャンプ本」を選ぶ際、挙手を求める方式から記名方式に変更したこともあり、平均 3.1 となり、高得点となっている。

本大会のアンケートで平均値が低かったのは、「9. [質問] 来年は国際交流学部の「図書紹介バトル」で発表したいと思いますか」(平均 2.0) であった。

(3) 調査 3 出場者アンケート

1) 調査の概要

「出場者アンケート」では、本を紹介する発表者として、また、発表を見守る観戦者として、さらには、大会の運営に携わる一員としての意見をたずねた。

アンケート項目は、調査 2 と同様、九州国際大学図書館 (2014)・山路 (2013) を参照し、以下の 24 の設問を立てた。このうち、質問 2～6、21～24 が「来場者 (学生)」アンケートと共通の内容である。また、質問 16「発表する時に最も気を付けたことは？」・質問 17「発表する時に他に気を付けたことや工夫したことは? (自由記述式)」が本大会のアンケートで新たに追加した項目となる。

表-5 「図書紹介バトル (出場者・学生)」のアンケート項目

1. [質問] 図書紹介バトルで発表できて、楽しかったですか。
2. [質問] 図書紹介バトル (来場者・学生) で他の参加者の発表も聞くことができ、楽しかったですか。
3. [質問] 図書紹介バトルで他の参加者の発表を判定する (投票する) ことができ、楽しかったですか。
4. [質問] 図書紹介バトルに参加して、他の発表者が紹介した本も読みたいと思いましたか。
5. [質問] 今回の図書紹介バトルでは、大阪観光大学図書館や熊取図書館の本を紹介しました。図書館に行きたいと思いましたか。
6. [質問] 今回の「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」に参加して、本を読むことが好きになりましたか。
7. [質問] 大勢の前で話すことが得意になりましたか。
8. [質問] 自分の発表に満足していますか。

9. [質問] 「図書紹介バトル」当日まで、発表の準備ができましたか。
10. [質問] グループで発表した人に質問します。発表の時、リーダーを中心にチーム全員が協力していたと思いますか。
11. [質問] グループで発表した人に質問します。発表の時、あなた自身は、チームの中での自分の役割を果たすことができましたか。
12. [質問] 発表を聴いた人が自分の発表に興味を持ってくれたと思いますか。
13. [質問] 発表を聴いた人に自分が発表した本の内容が伝わったと思いますか。
14. [質問] 発表を聴いた人に自分が発表した本に対する気持ち・考えが伝わったと思いますか。
15. [質問] 発表を聴いた人にわかりやすいように大きな声でゆっくり話すことができましたか。
16. [質問] 発表する時に必要とされる言葉遣い (「です・ます」体を使って話す、など) を意識して話しましたか。
17. [質問] 発表する時の姿勢や態度はどうでしたか。前を見て、元気に、自信を持って発表できましたか。
18. [質問] 発表する時、最も気を付けたことは何ですか?
(「本の内容」「本に対する気持ち」「大きな声でゆっくり話す」「言葉遣い」「姿勢や態度」の中から 1 つ選択)
19. [質問] 発表する時、「本の内容」「本に対する気持ち」「大きな声でゆっくり話す」「言葉遣い」「姿勢や態度」の他に観客によく伝わるように気を付けたことや工夫したことはなんですか?
20. [質問] 質問された時、上手に質問に答えることができたと思いますか。
21. [質問] 発表時間 (スピーチ 5 分 + 質疑応答 3 分) を長いと感じましたか。短いと感じましたか。
22. [質問] 今回の「図書紹介バトル」や「図書ポスター展」で発表した経験がこれからの学び (レポートを書く、口頭発表をする) の役に立つと思いますか。
23. [質問] 来年も国際交流学部の「図書紹介バトル」を観たいと思いますか。
24. [質問] 来年も国際交流学部の「図書紹介バトル」に参加したいと思いますか。

本調査は、「図書紹介バトル」大会の 2 日後、11 月 5 日 (火) の「A スタジオ」授業時に質問紙を一斉に配布し、実施した。回答は、5 段階評価とし、自由記述式の

アンケート「大会に参加してよかったこと・反省すること」・「来年の大会に期待すること(改善点)」も行った。

2) 調査結果

個人発表4名, グループ発表3組のうち, 個人発表の2名とグループ発表2組の計8名が本調査に協力した。アンケートの結果, 「質問1」(発表できて楽しかったか?) や「質問6」(本を読むことが好きになったか) で高い得点が見られ(いずれも8名中7名が「はい」), 「来場者(学生)」に対するアンケートと共通していた。

発表者のみにたずねた項目で, 高得点であったものは, 以下の通りである。

10. [質問] (中略) 発表の時, リーダーを中心にチーム全員が協力していたと思いますか。

はい	5名	まあまあ	2名	どちらとも言えない	1名
あまり	0名	まったく	0名	平均	3.5

16. [質問] 発表する時に必要とされる言葉遣い(中略)を意識して話しましたか。

はい	3名	まあまあ	2名	どちらとも言えない	2名
あまり	2名	まったく	1名	平均	3.0

14. [質問] 発表を聴いた人に自分が発表した本に対する気持ち・考えが伝わったと思いますか。

はい	1名	まあまあ	6名	どちらとも言えない	1名
あまり	0名	まったく	0名	平均	3.0

11. [質問] (中略) 発表の時, あなた自身は, チームの中での自分の役割を果たすことができましたか。

はい	2名	まあまあ	3名	どちらとも言えない	3名
あまり	0名	まったく	0名	平均	2.875

13. [質問] 発表を聴いた人に自分が発表した本の内容が伝わったと思いますか。

はい	1名	まあまあ	5名	どちらとも言えない	2名
あまり	0名	まったく	0名	平均	2.875

グループ発表を行った学生はいずれもチームで協力できたことと答えており, チーム内での役割も果たすことができたとしている。また, 個人発表の者を含む学生が, 発表という場にふさわしい話し方で, 本に対する気持ちや考え, 本の内容を伝えることができたという。

発表する際, 最も気を付けたことについて, 5つの選択肢から1つ選ぶ質問18では, 「本の内容」・「大きな声でゆっくり話す」・「本に対する気持ち」の順で多かった。さらに, その他, 発表時に気を付けたことや工夫したこ

とについての自由回答では, 「前(観客)を見てよく話す」・「わかりやすいことばで話す」・「観客に留学生が多かったのでゆっくり話す」といった口頭表現のスキルに関するものや「緊張しないで話す」・「自信をもって話す」といった心情面, 「本の内容がわかるようにはっきり発表する」・「登場人物がどんな人物であるかを伝える」といった内容面に関わる回答が見られた。

得点が低い質問項目は, 「質問20」などであった。

20. [質問] 質問された時, 上手に質問に答えることができたと思いますか。

はい	0名	まあまあ	2名	どちらとも言えない	2名
あまり	1名	まったく	2名	平均	1.375

17. [質問] 発表する時の姿勢や態度はどうでしたか。(中略)

はい	0名	まあまあ	3名	どちらとも言えない	1名
あまり	1名	まったく	3名	平均	1.5

7. [質問] 大勢の人の前で話すことが得意になりましたか。

はい	1名	まあまあ	0名	どちらとも言えない	4名
あまり	1名	まったく	1名	平均	1.625

昨年実施したアンケート結果と同様, 質疑応答の出来に対する回答が最も低かった。思いもよらない質問で苦心した様子が見えがえる。次いで, 発表態度や姿勢, 大勢の人の前で話すことに関する質問が低かった。

3) 来場者(学生)の自由回答から

「来場者(学生)」の自由記述式アンケートの言葉から, 前出のアンケートの調査結果を補足する。

「大会に参加してよかったことは?」・「来年の大会に期待すること(改善点)は?」の2点について, 自由回答欄に意見を寄せてもらった。

「みんなの発表を楽しむことができた」・「日本語の発表が上手だった」・「さまざまな知識を紹介してくれて色々な知識を学ぶことができた」・「みんなの紹介した本の内容と情報を取って本を読む気持ちが前よりとても増えた」・「観客がもっと多いといいと思う」といった声があった。「図書紹介バトル」の発表を楽しみ, 発表が新たな知識の世界を広げるきっかけとなり, 本を読みたいという内発的な動機付けも高まったことがうかがえる。

4) 発表者の自由回答とフォローアップインタビュー

ここでは, 「発表者」対象の自由記述式アンケートの結果及びその記述をもとに行なったフォローアップインタビューの結果を見ていく。

「大会に参加してよかったことは?」「大会に参加して反省することは?」「来年の大会に期待すること(改善点)は?」の3点をたずねた。インタビューで発表者の語った内容は、以下の4つにカテゴライズできる。

《発表の経験》

学生 A (個人発表) は、「人前で話すことが苦手で、いつか克服したいと思っていた。発表の機会を得て、苦手意識が薄れた。自分の好きな本を多くの人に知ってもらえるのが何よりうれしかった」と語った。

発表時に「すごく緊張した」と語る学生 B (グループ発表) は、緊張した理由を「自信がなかったから」と話し、それを克服するために、発表内容を暗記するまで練習を重ねること、顔を上げ、視線を前方に向けて話すこと(鏡の前で話す練習)が必要であると話した。

《グループでの発表準備》

学生 C (グループ発表) は、もともとグループ発表に対する苦手意識があり、人前で自分の意見を伝えるのは難しかったと話す一方、発表準備の際、グループで互いに情報共有をし、発表内容をいっしょに考えることができて、チームワークが良くなったことを喜んでいた。

学生 D (グループ発表) は、「チームを作って、みんな互いにがんばったが、情報を並べて(列挙して)意見を出すのはちょっと困った」と答え、それを改善するためには、発表する時に話すことを分ける(役割を分担すること)、特に会場からの質問に対応できる役割を作ること、本が1冊しかなく、グループで発表準備をする時間にしか読めなかったため、各自が本を手に入れ、読んでおくことが必要であると語った。

《発表の技術》

前述の「発表時間の長さ」に関する質問で、「発表時間が非常に長い」と答えた学生 E (グループ発表) がいた。彼女は、発表の冒頭にメンバーの自己紹介を入れ、また、観客に向けて「みなさんは、〇〇が好きですか?」などと質問をはさむなどの工夫をしたという。彼女にとっては、制限時間をフルに使い、時間が残るのを回避するためのストラテジーだったかもしれない。しかしながら、これがコミュニケーションの場作りにプラスに作用し、発表者の「人となり」を知らせ、親近感を抱かせ、結果的に観客との相互理解につながった。ここでは、深澤ほか(2018)の「コンテクスト共有」(話し手と聞き手が共通

して持つ経験や認識に言及し、その後話し手が語る内容を受容しやすくするための方法)が機能している。

《質疑応答》

前述の「質疑応答」に関する質問で、「質問にあまり上手に答えることができなかった」と言う学生 F (グループ発表) は、観客からの質問(作者が本を通して主張したいことは何?)に的確に答えることができなかったことを後悔し、「わからなかったのもう一度お願いします」と聞き返しをすればよかったと話していた。彼女は、発表準備で用意した話したいこと・伝えたいことは、全て話せたと話す。それでも、前述の「発表の満足度」の質問では、「どちらとも言えない」と答えていた。これについて、「満足したと言える発表をするには、グループでもっと話す練習をし、またどんな質問が出るか、予想して練習しておくことが重要である」と語った。

7. まとめ

本稿では、本学で実施した大学祭企画「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」の模様を中心に、「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」に開催に向けての指導の実際を報告し、学部留学生と日本人大学生に対し、初年次教育の一環として行った、『ビブリオバトル』活動の教育上の有効性について考えた。

初年次教育の活動の中に、「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」を組み込むことで、学生が図書に親しみ、図書館を利用する習慣を身につけ、情報収集の方法を会得し、学術的文章の作成に必要なアカデミックスキルを高めることにつなげることができよう。

加えて、「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」という形態の異なるイベントを共催することで、両者の特性を生かしつつ補完し合い、本を介したコミュニケーションが行われることで、谷口(2013)の「本を通して人を知る」、「コミュニケーションの場作り」、中川(2017)の「読書と人の輪を広げる」、「人と本との出会い」を生む『ビブリオバトル』活動が実現できたと考えている。

今回開催した「図書紹介バトル」の「紹介本」と、「図書ポスター展」のポスター及び「紹介本」は、大会終了後、本学図書館の特設コーナーに展示された。「紹介本」が人との出会い・本との出会いを育み、図書館に足しげ

く通い、多くの図書に触れ、様々な知識を吸収し、また、図書について語らうきっかけとなることを願っている。

次年度以降「図書紹介バトル」・「図書ポスター展」開催の折には、発表者や制作者、また、大会に関わる参加学生にとって、さらには「プレスタジオ」で行う初年次教育で、特にレポートや口頭発表のスキル向上といった面からも、満足の行く大会としたいと考えている。

謝辞

「図書紹介バトル」の開催にご尽力くださった本学国際交流学部の教員の皆様、大阪観光大学図書館・熊取図書館の図書館員の皆様に深く感謝いたします。また、「図書ポスター展」の開催に際し、中京大学・中川豊先生からメールで直々に貴重な助言を賜りました。ポスターの作成方法から展示方法に至るまで、懇切丁寧に教えていただき、無事に「ポスターバトル」を終えることができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

【引用・参考文献】

相澤文恵・藤澤美穂・平林香織 (2015) 「アカデミック・リテラシーの教育効果の検討: アンケート調査結果からの考察」『岩手医科大学教養教育研究年報』50号

赤池勇鷹・谷口忠大 (2014) 「ビブリオバトルにおける発表制限時間のデザイン」『日本経営工学会論文誌』65巻3号

九州国際大学図書館 (2015) 「教職協働で作る学修支援—ビブリオバトルの手法を活用したグループワークと読書ノートの構築—」私立大学図書館協会

岡野裕行 (2016) 「ビブリオバトルを通して読書について考える」『情報の科学と技術』66巻10号

河野哲也 (2018) 『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶応義塾大学出版会

佐久間司郎 (2016) 「ビブリオバトルを取り入れた日本語授業の実践報告」『日本近代学研究』第53号 韓国日本近代学会

菅原和夫・虫明美喜 (2014) 「話す活動に位置づけた知的書評合戦ビブリオバトルにおけるスピーチの特徴—独話的スピーチから聞き手を意識したスピーチへ—」『日本語教育方法研究会誌』21巻1号

住木俊之 (2016) 「大阪観光大学図書館におけるラーニング・コモンズの活用」『大阪観光大学紀要』16号

副島雄児・田尾周一郎・平井康丸・金山素平ほか (2013) 「本を

通して仲間を知る: コアセミナーでの試み」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2012/2013

谷口忠大 (2013) 『ビブリオバトル 本を知り人を知る書評ゲーム』文春新書 901 文藝春秋

谷口忠大・川上浩司・片井修 (2010) 「ビブリオバトル—書評により媒介される社会的相互作用場の設計」『ヒューマンインタフェース学会論文誌』12巻4号

内藤真理子 (2013) 「聞き手に寄り添うことを意識するための試み—ビブリオバトルを通して—」『日本語教育方法研究会誌』20巻1号

中川豊 (2017) 「ポスターバトル! —学生が選んだオススの一冊—」『中部図書館情報学会誌』57巻

廣瀬清英・藤澤美穂ほか (2014) 「ビブリオバトル: アカデミック・リテラシーにおける図書館職員との協働」『岩手医科大学教養教育研究年報』49号

廣瀬清英・藤澤美穂ほか (2015) 「ビブリオバトル: アカデミック・リテラシーにおける図書館職員との協働: 2015年版」『岩手医科大学教養教育研究年報』50号

深澤のぞみ (2017) 「日本語教育におけるパブリックスピーキング —21世紀に必要な学びの1つとして—」『金沢大学留学生センター紀要』20号

深澤のぞみ・山路奈保子・須藤秀紹 (2018) 「日本語パブリックスピーキングにおける説得の特徴—書評ゲーム「ビブリオバトル」の観察から—聞き手に寄り添うことを意識するための試み」『日本コミュニケーション研究』47巻1号 日本コミュニケーション学会

藤勝宣・坂田絵里奈・原田佳子・島浦一博 (2016) 「図書館を活用した授業デザインの研究: ビブリオバトルを利用した教職協働授業の試み」『九州国際大学教養研究』23巻2号

堀恵子 (2016) 「〈報告〉上級者対象口頭表現クラスでの活動と自己評価の変化: アカデミック日本語として何を指すか」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』31号

山路奈保子・須藤秀紹・李 セロン (2013) 『「ビブリオバトル」導入の試み—日本語パブリックスピーキング技能育成のために—』『日本語教育』155号

湯浅千映子 (2019) 「初年次教育におけるビブリオバトルの手法を用いた取り組みと課題—「大阪観光大学国際交流学部第一回図書紹介バトル」実践報告と事後アンケート結果から—」『大阪観光大学紀要』19号